

## クリティカルリンクインターナショナル 9 学会報告

<sup>1</sup>押味貴之<sup>1</sup>、<sup>2</sup>大野直子<sup>2</sup>、<sup>3</sup>高木真知子<sup>3</sup>、<sup>4</sup>友野百枝<sup>4</sup>、<sup>5</sup>藤井ゆき子<sup>5</sup>、<sup>6</sup>森田直美<sup>6</sup>

<sup>1</sup>国際医療福祉大学、<sup>2</sup>順天堂大学、<sup>3</sup>フリーランス手話通訳者、<sup>4</sup>フリーランス通訳者、

<sup>5</sup>日本通訳品質評議会、<sup>6</sup>全国医療通訳者協会 (NAMI)

### 1. はじめに

コミュニティ通訳の国際会議である Critical Link International (CLI) の 9 回目となる会議 “Critical Link International 9 (CLI9)” が、2019 年 6 月 14 日から 16 日にかけて東京の国際医療福祉大学赤坂キャンパスにて開催された。

世界中から医療通訳・法廷通訳・行政通訳・手話通訳などのコミュニティ通訳関係者が集まるこの国際会議は 3 年毎に英語圏で開催されてきたが、英語圏以外で開催されるのは今回の CLI9 が初めてであり、世界 26 カ国から 262 名が参加して “Community Interpreting in the Age of AI (人工知能時代のコミュニティ通訳)” をテーマに活発な議論を展開した。

近年は自動翻訳・通訳機器の発達が目覚ましい。これらは近い将来「原文に忠実で正確な通訳をすること」という通訳者の役割を完璧に代替できるようになることが予想されている。しかし、コミュニティ通訳者にはこれ以外にも「通訳した内容が正しく理解されたかを確認すること」と「文化の違いを確認して相互理解のきっかけを作ること」という役割も求められる。CLI9 ではこの「対話する二者の間に入り、それぞれの発話を解釈して相互理解を補助すること」というコミュニティ通訳の役割がどのように自動翻訳・通訳機器に代用されるのかを考えることで、現在のコミュニティ通訳を取り巻く問題点の本質を探る議論が展開された。基調講演としては下記の 4 名の講演者が人工知能時代におけるコミュニティ通訳の問題点とそれを取り巻く状況を提示した。

“Nagasaki Tsuji and Community Interpreter as Multi-Task Mediator” by Kumiko Torikai, Ph.D.

“Toward Automatic Speech Interpretation” by Satoshi Nakamura, Ph.D.

“The complexities of legal interpreting. Can machines replace human interpreters?” by Prof. Sandra Hale

“Community interpreting, borders and language contact: a continuum of possibilities” by Prof. Claudia V. Angelelli

これに続いて 2 つのシンポジウム、1 つのパネルディスカッション、2 つのワークショップ、7 つのポスター発表が実施された。また 75 の口頭発表がそれぞれ「人工知能と通訳」「養成と認証」「医療通訳」「法廷通訳」「その他コミュニティ通訳の話題」という 5 つの

テーマに分かれて実施された。今回の CLI9 は日本のコミュニティ通訳関係者にとって世界のコミュニティ通訳関係者と出会う貴重な機会となったと考えられる。(押味貴之)

印象に残った発表として、まず基調講演が挙げられる。ほぼ全ての講演者がコミュニティ通訳の AI 化に疑問を呈していた。そして日本の研究者たちによる「法廷通訳」「医療通訳」「手話通訳」のシンポジウムも印象的であった。法廷通訳シンポジウムでは模擬法廷により日本の法廷通訳の現状を紹介し、医療通訳シンポジウムでは日本の医療通訳の課題を述べ、コミュニティ通訳先進国であるオーストラリアやカナダの研究者と議論した。手話通訳のシンポジウムに関しては本稿の「4.手話通訳について」に後述のとおりである。Pre-Conference イベントは日本庭園と神社見学で、18名の参加者が快晴の中で日本の伝統美に触れた。正式な Post-Conference イベントはなかったが、参加した海外の研究者が他大学にも招かれ講演を行っていた。(大野直子)

## 2. 運営体制

本会議の特色は3点あった。まず1点目は日本開催の会議でこれほど外国人比率の高い会議は稀であるということである。日本政府観光局の国際会議統計資料によると、200名～299名の規模の会議において、外国人参加者数は2割に満たないのが現状である。今回の会議においては、登録上では日本となっている在留外国人の方々を含めてカウントすると、200名強の参加者のほぼ7割が外国人となる。2点目は運営にかかわる事務局メンバーが全てボランティアであり、会議運営を専業としているメンバーがいないということである。3点目は会議当日のスタッフが通訳者を含め全てボランティアであり、かつ学生と社会人が混合で対応に当たっていたことである。5会場平行で、発表者は90名以上、レセプションやサイトツアーを含めて2日半の会議で外国人比率が70%の国際会議となると、会議運営会社においても難易度の高い会議である。そのため、かかわった事務局メンバーが専業の別業務をこなしながら、気づいた人が率先してやる、アイデアをどんどん出すという形で準備作業を進めて行った。いわゆるクライアントがあってその指示で仕事をするのではなく、全員が自分の役割を認識して貢献していく形だった。会期中においても自ずとリーダーシップをとるスタッフが現場を纏め臨機応変に対応できた事が会議の成功と参加者の満足につながったと思われる。(藤井ゆき子)

運営の実働は総勢60名のボランティアが支えた。3日間のべ141名のボランティアにご協力いただいた。ボランティアは、全国医療通訳者協会の会員、順天堂大学の学生、国際医療福祉大学大学院生を中心に募集をした。これとは別に募集した通訳ボランティアは、開閉会式、基調講演の同時通訳を担当したが、空いた時間に一般のボランティアの手伝いもした。開会2週間ほど前には必要となる場所と業務を特定し、運営マニュアルも準備した。金銭の授受のある受付や各部屋のPC、装置類の扱いは確実にこなせる方をアサインし、あとは必要に応じて柔軟に配置を変更した。初日に全体説明と学会バックや名札などの下準備を行い、その後持ち場毎に動いてもらった。混乱や時間の遅れもほとんどなく、運営は順調に進んだ。ウェルカムパーティーやGALAでは、学生たちが盆踊りを披露したり、歌で参加者を

歓迎したりと素晴らしい盛り上がりを見せた。最終日には、多くの参加者から通常の学会では聞くことができない労いの言葉をいただいた。全体が柔らかな、誰でも受け入れてくれるような雰囲気を醸し出していたのは、困っている人たちを支えたいと考えている「コミュニティ通訳」の学会だったからだけではないだろう。なかには手話ボランティアとして受付にずっと座ってくださった方もいた。今後のコミュニティ通訳のために少しでも尽力できればと気持ちを新たにした。(森田直美)

### 3. 通訳ボランティアについて

通訳学の専門家の基調講演をボランティア通訳が同時通訳すると言うのは、バタ足をおぼえたばかりの子供たちをいきなりプールに放り込むに似た暴挙であるという意識であった。募集にあたり、名古屋外国語大学主催の学生通訳コンテスト出場者、かつて通訳学校で教えた教え子、他の先生が教えたことのある学生さんたちに呼び掛けたところ、東京と関西で合計 20 数名の候補者が集まった。

研修は、順天堂大学国際教養学部の教室で行った。一回の研修を 2 時間程度とし、動画やスピーチ音声を聞いて逐次通訳するところから始めた。集まったボランティア通訳の陣容を見ると、学部の学生が 9 名、通訳学校の生徒が 6 名、あとは社会人であった。一応通訳入門コースを終えた学生、短期の通訳コースを履修したことのある人が多いものの、実際の通訳経験がある人は数名にすぎなかった。東京グループに関しては、13 回の研修の中で、通訳の基礎訓練、今回の会議の基調講演者に関するリサーチを中心に進めた。幸い、Hale 先生と Angelelli 先生に関しては過去の色々な学会での講演動画がいくつか YouTube にアップされているのでそれを使って通訳練習ができた。鳥飼先生の通訳準備としては、多数の著書の中から、学術的なものを選んで読ませた。後から決まった AI の専門家の中村哲先生の「自動通訳を目指して」が一番難解だと考え、通訳経験者、学生通訳コンテスト出場者で固めた。

同通グループは、4 名の基調講演者+開会式と閉会式の 6 チームに分けた。本番の講演では 4 人のメンバーが大体 2-3 巡するタイミングで交代していた。同時通訳機材に起因する多少のトラブルはあったが、全体に観て予想を超えるパフォーマンスであった。ボランティア通訳のメンバーからは満足した様子のコメントが寄せられている。これをきっかけにコミュニティ通訳に対する関心が深まることを期待している。(友野百枝)

### 4. 手話通訳について

CLI9 では、英語の会議通訳ができる手話通訳者の協力を得て、開会式、閉会式、3 つの基調講演、9 つの分科会に日本手話通訳を提供できた。今回の CLI9 では、手話通訳に関する講演が 7 つとポスター発表 4 点に加えて、「研究が手話通訳の実践と通訳者の養成にどのような影響を与えるか」と題したパネルディスカッションが行われた。多数の参加者とパネリストの間で活発な意見交換ができ、手話通訳への関心の高さが感じられた。基調講演者の Claudia Angelelli 氏と Sandra Hale 氏は、ともにその講演の中でコミュニティ通訳現場の談話の実例をいくつも紹介し、コミュニティ通訳の難しさを示し、はたして将来この複雑な仕事

を AI がこなせるようになるだろうかという疑問を投げかけていた。一般的には音声言語通訳よりも手話通訳の方が AI 化するのが難しいとされてはいるが、利用者の数の少なさから、経済性を求めて意外と早く AI 任せにされてしまう危険性もある。手話通訳の研究者も音声言語通訳の研究者と協力し、今後この課題により真剣に取り組む必要があると感じた。(高木真知子)

## 5. おわりに

2016 年のスコットランドの CLI8 閉会式で次期開催地の発表後に日本に招致するスピーチを行ってから、2019 年 6 月 14 日の CLI9 開会まで、20 回以上の準備会議と数えきれないほどのメールのやりとりと作業を重ねてきた。当日は、Pro bono として通訳指導や通訳ガイド、事務等の経験者に学会を支えていただいた。まさに「公共善のために (pro bono publice)」という関係者の思いが結実し、コミュニティ通訳の発展を願う多くの方々の支えで CLI9 国際学会は無事に終了した。(大野直子)

.....

### 【謝辞】

学会を支えてくださった全てのボランティア、Pro bono の皆さんと、日本通訳翻訳学会の諸会員の方々に感謝申し上げます。

.....

### 【著者紹介】

押味貴之 (OSHIMI Takayuki) 国際医療福祉大学医学部 医学教育統括センター准教授、大学院 医療通訳・国際医療マネジメント分野主任。

大野直子 (OHNO Naoko) 順天堂大学 大学院医学研究科、国際教養学部講師 (医療コミュニケーション、医療通訳)。

高木真知子 (TAKAGI Machiko) フリーランス日英会議通訳者、手話通訳者。CLI9 では英語から日本手話に通訳することが出来る、日本で数少ない精鋭の手話通訳者を統括した。

友野百枝 (TOMONO Momoe) 元大阪女学院大学准教授、フリーランス通訳者。長年サイマルアカデミーで通訳の講師を務める。

藤井ゆき子 (FUJII Yukiko) (株) サイマル・インターナショナルにて約 30 年間通訳コーディネーターとして勤務、2012 年 11 月に代表取締役就任。2017 年 4 月末に退任後、一般社団法人通訳品質評議会理事。

森田直美 (MORITA Naomi) 一般社団法人全国医療通訳者協会 代表理事。東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻修士課程在学中。